

保育におけるわらべうたの教育的効果 ～担任アンケートとわらべうた遊びの分析を通じた考察

渡 辺 優 子

新潟青陵大学看護福祉心理学部福祉心理学科

Educational Effects of Traditional Japanese Children's Songs (*Warabe-Uta*) in Preschool
: Analyses of Results from a Questionnaire Given to Classroom Teachers, and from
Observation of Children Enjoying These Songs.

Yuko Watanabe

NIIGATA SEIRYO UNIVERSITY DEPARTMENT OF SOCIAL WELFARE AND PSYCHOLOGY

要旨

わらべうたが保育においてどのような効果を持つのか、4園の5歳児のわらべうた遊びの様子を観察し、声紋分析、日本語のリズムやアクセントの特徴、旋律構造、拍節感などから分析した。また、それぞれのクラス担任へのアンケートより、わらべうたの効果やイメージについて考察した。その結果、わらべうたは日本語のリズムやアクセントなどと深く関係しているが、単に日本語の特徴に忠実に従っているのではなく、単純な構造の中に、子ども達の心を惹きつける様々な仕掛けがあることがわかった。担任アンケートにおいては、全般的には、わらべうたの効果을認めているものの、なじみがないなどの意見もあった。今後は、わらべうたを効果的に保育に生かす方法の検討が必要であると考えられる。

キーワード

わらべうた、遊び、声紋分析、日本語のリズム、アクセント

Abstract

The educational effects of teaching traditional Japanese children's songs (*warabe-uta*) were observed and analyzed at four different preschools, where the children were five and six years old. Analyses were made of sound spectrograms of these songs, of the relationship of these songs to particular rhythms and accents in the Japanese language, of their melodic structure, as well as of their ability to develop the children's sense of rhythm. Classroom teachers' responses to a questionnaire were also analyzed, in order to discern what results these teachers hoped to achieve with these songs.

Our analyses revealed that the songs were deeply related to rhythms and accents in Japanese, and that they not only reflect such naturally-occurring characteristics of the Japanese language, but also contain in their simple structures various elements which make them particularly attractive to children. The questionnaire responses revealed that teachers generally expected the songs to be educationally effective, but on the other hand, some respondents did not feel very comfortable using them. It seems further research will be necessary, in order to develop techniques designed to take fuller advantage of the educational potential of these songs.

Key words

traditional Japanese children's songs, warabe-uta, child play, sound spectrogram, Japanese rhythm, Japanese accent

I はじめに

日本のわらべうたについては、すでに様々な研究がなされてきた。民俗学、音楽学、教育学などから、様々な観点からのアプローチがある。初期の民俗学的研究（歌詞の採取や分析）、小泉文夫による音階やリズムなどの音楽的側面の分析、藤田美美子らによる人類学的アプローチなどである。

本稿では、保育におけるわらべうたの効果について、次の2点より考察する。第1に、5歳児（年長クラス）の担任へのアンケートから、保育におけるわらべうたの意味について考察する。第2に、子どもたちのわらべうた遊びの分析から、子どもたちに働きかけるわらべうたの効果について考察する。第2の分析の視点として、A.わらべうた遊びの観察、B.歌声の声紋分析、C.わらべうたを構成している日本語や日本伝統音楽の音組織の特徴の3点を取り上げる。その他、音楽的要素としてメロディー構造や拍子についても取り上げる。

わらべうたを集団で歌っている音声の声紋分析によって、従来の聞くことによる分析に裏付けを与えることができる。また、日本語とわらべうたの関係性についてはこれまでの研究でも言及されているが、詳細な分析に乏しい。本研究においては、日本語リズム論や、小泉文夫の音階論を参考にして、わらべうたに含まれる日本語の持つリズムやフレーズ感について考察する。さらに、日本語の高低アクセントとわらべうたのメロディーの関係性を明確化する。以上の分析結果から、実際の子どもの遊びや歌声に与える効果について検討する。

II 調査

本稿のデータは「子ども達のわらべうたの感覚や歌声についての調査」の際に得られたものである。なお調査の前に新潟青陵大学倫

理委員会の審査を受け、調査園には事前に研究計画、依頼文書、個人情報保護についての事前文書や誓約書を送り同意を得ている。

- ・調査時：平成12年12月、平成13年1月、平成13年2月
- ・調査対象：幼稚園1園（S幼稚園）と保育園3園（A保育園、B保育園、C保育園）の5歳児（年長組）
- ・調査内容

- ① 担任へのアンケート
- ② 子ども達の歌声の観察と録音（わらべうた1曲とわらべうたではない子どもの歌1曲）

子ども達の歌声の録音のうち比較的声が揃っている部分は日本音響研究所に依頼して声紋分析を行った。S幼稚園分は当日わらべうたの録音ができなかったため、平成11年12月の予備調査の歌声を使っている。わらべうたではない子どもの歌については、ピアノ伴奏が入ったものは声紋分析ができなかった。

- ・録音の声紋分析を行った曲

S幼稚園：「どんどんばしわたれ」

A保育園：「なべなべそこぬけ」

B保育園：「ずいずいずっころばし」

C保育園：「なべなべそこぬけ」

III 調査結果とその分析

1. 担任アンケートより見るわらべうたの効果（表1参照）

アンケート結果からまず言えることは、どの園でも多くのわらべうたを歌っているということである。S幼稚園はシュタイナー教育を取り入れているので、14曲と多くのわらべうたが歌われているが、他園も多くのわらべうたを取り入れている。シュタイナー教育では幼児と小学校低学年の子ども達の意識状態は5度の響きと関係付けられているため¹⁾、5音音階（全音的5音音階）のメロディーが多く使われている。S幼稚園でも、日本のわら

表1 担任へのアンケート結果

※()内の数字は回答数

1、	年齢	30代2人、20代2人
2、	クラス担当期間	半年から1年:3人 1年から1年半:1人
3、	今年度に歌ったわらべうた:	14曲、12曲、6曲、3曲、6曲 その内訳 ・手遊び歌 お寺のおしょうさん(3)、げんこつやまのたぬきさん、ちゃつぽ(2)、12の3、おべんとうばこのうた、ふくすけさん、チューリップシャーリップ ・鬼ごっこ あぶくたった、今年のぼたん ・その他の遊び歌 はないちもんめ(3)、かごめかごめ(3)、なべなべそこぬけ(3)、ずいずいずっころばし(2)、一本橋こちょこちょ、もちつき、あんたがたどこさ、大なみ小なみ、どんどんばし、たけのこ一本、からすかずのこ、ひとまねこまね、おてぶしてぶし
4、	子ども達はわらべうたを好むか	3(普通):1、4(好んでうたう):1、5(とても好んで歌う):2 その理由・遊び相手がいないと歌わない。 ・すぐに覚えて、歌詞もくり返しのため分かりやすい ・歌いやすさ ・くり返しを楽しむ
5、	子ども達がわらべうたをうたっている様子で気づいたこと	・初めて歌うものでも2,3回で覚えてしまう。覚えやすいリズム、韻、くり返しなどが多い ・友達同士で楽しみながら笑顔で歌う ・保育士が中に入らなくても子ども達同士で遊ぶ。なべなべそこぬけ、はないちもんめが好きな遊び。 はないちもんめは歌詞を覚えるのに時間がかかった ・新しいものでもすぐに歌ややり方を覚える。あきることなくくり返して楽しんでいる。
6、	わらべうた以外で子ども達が好んで歌う歌	さんぽ(2)、こどもの世界、虹のむこうに、勇気100%、こどもの世界 その時流行している歌、毎月の歌を1~2曲歌っている スマイル、カレンダーマーチ、にじ ライゲン:大地のかあさん、たんぼぼ、雨、田植え、落ち葉 りんごもぎ、もみの木、小人、お月見、七夕など
7、	クラスで歌う歌を選ぶ際に考慮すること	1:季節感(4)、2:行事(3)、3:子どもの興味(1)、6:楽しさ(1)、7:歌いやすい(1)、 8:子ども達の気持ちをひきつける(2)、9:その他 歌の雰囲気が子ども達に合う(1)
8、	わらべうたのイメージ	5(その通り)、4(ほぼそのように思う)、3(そうともいえない・分からない)、 2(そうではない)、1(全くそうではない) a、子ども達が楽しめる 5:(3)、4:(1) b、古臭い 2:(3) c、なじみがない 4:(2)、3:(1) d、集団で楽しめる 5:(1)、4:(2) e、コミュニケーションの手段になる 5:(2)、4:(1) f、子ども達を育てる 5:(1)、4:(1)、3:(1) g、その他の御意見 ・担任の模倣をしながら、歌声やリズムの中で安心感を得ることができる ・クラスで輪になる楽しさ、一体感を感じることができる
9、	自身が子どもの頃歌ったわらべうた	はないちもんめ(2)、ちゃつぽ(2)、おちゃらかほい、お茶を飲みにきてください、 おせんべやけたかな、かごめかごめ、おてらのおしょうさん、ちゃつぽ、あぶくたった ゆうびんやさんのおとしもの、あんたがたどこさ、おおなみこなみ、ずいずいずっころばし

べうたや、シュタイナー教育で使われる5音階の歌が多く取り入れられている。

わらべうたを保育に取り入れる理由としては、子ども達が好むこと、子ども達が覚えやすく歌いやすいこと、友達同士でくり返して遊びを楽しめることなどがあげられている。

わらべうたのイメージとして肯定的なものは、子ども達が楽しめる、集団で楽しめる、コミュニケーションの手段になることである。しかし、なじみがないと感じることもあるようだ。

子どもを育てるかどうかについては意見が分かれている。その他、担任と一緒に歌うことで安心感を得ることができる、クラスで輪になって遊ぶことで一体感を感じることができるという意見もあった。

わらべうたが子ども達に好まれることがまず事実としてあり、子ども達同士が集団で楽しめることから、次にコミュニケーションの手段となり、クラスの一体感を醸し出す手段にもなるということである。

なぜわらべうたが子ども達に好まれ、集団での遊びに向いているのか、実際の子どものわらべうた遊びの状況について、まず、観察と歌声の声紋分析により検討する。次に、日本のわらべうた独自の構成について、日本伝統音楽の旋律型ならびに日本語のリズムやアクセントとの関係より分析するとともに、旋律構造や拍子についても考察する。

2. わらべうた遊びはなぜ子ども達に好まれるのか

1) わらべうた遊びの観察結果

(1) 4園とも、全員楽しく張り切って遊ぶ。

遊びがくり返される時、違う高さの音（ほぼ1音の違い）で歌いだす子どももいる。その場合、すぐには「音程のずれ」が解消されず、しばらくずれたまま歌われ、その後どちらかの音に統一される。

(2) 遊び方と歌い方の関連性（振幅分析図：図1-1、図1-2、図1-3、及び、楽譜：図2-4参照）

遊びに対する期待や動きに勢いをつけるた

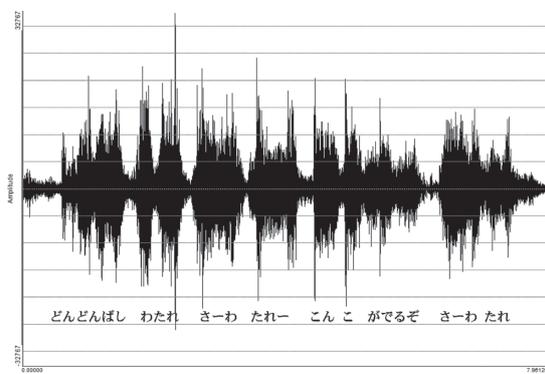


図1-1 どんどんばしわたれ 振幅分析図 (S幼稚園)

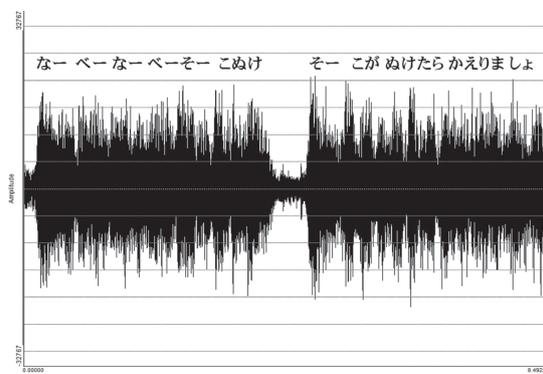


図1-3 なべなべそこぬけ 振幅分析図 (C保育園)

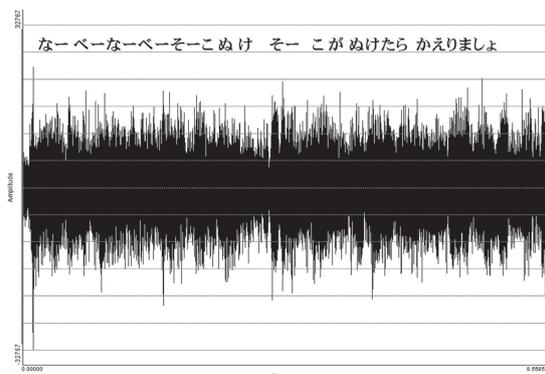


図1-2 なべなべそこぬけ 振幅分析図 (A保育園)

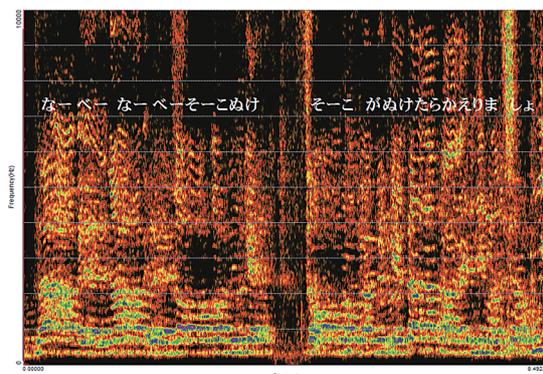
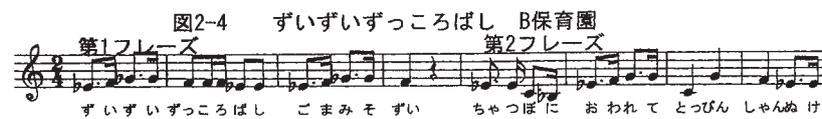
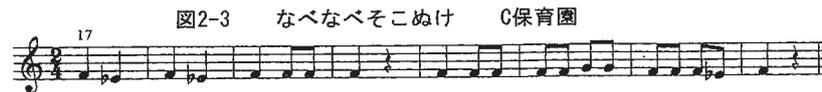


図1-4 なべなべそこぬけ 声紋分析図 (C保育園)

図2-1 どんどんばしわたれ S幼稚園



め、歌の始めの「どんどんばし」(S幼稚園：図1-1)や「なべなべ」「そこぬけ」(A保育園：図1-2・C保育園：図1-3)にアクセントをつけて歌う。またフレーズの終わりやおもしろい言葉、呼びかける言葉の最後にアクセントがついて、強く歌われる。「わたれ」、「こんこ」(S幼稚園：図1-1)などである。「どんどんばしわたれ」、「なべなべそこぬけ」の両方とも曲の最後に遊び方の変化があり、その変化に心が捉われるために、声が小さくなったり(どんどんばしわたれ)、声が揃わなくなる(なべなべそこぬけ)。音楽的感覚で曲の最後をゆっくり歌ったり、だんだん弱く歌ったりすることはなく、遊び方や言葉との関連で歌い方が変化する。

「ずいずいずっころばし」は8分音符で記

譜されることが多いが、子ども達は動作と合わせるために、動きをつけて、付点8分音符と16分音符のリズムで歌っていた。(楽譜：図2-4)このリズムはびよんこ節などと呼ばれることもあり、西洋音楽の歯切れよく跳ねるようなリズムではなく、長い音と短い音の組み合わせである。記譜としては3分割リズムの方が正確であるが、図では付点8分音符と16分音符で記譜している。

(3) 母音と子音(C保育園「なべなべそこぬけ」)声紋分析図：図14参照)

声紋分析では、母音のフォルマントがはっきりしている。また、子音のうち摩擦音(SやZ)、閉鎖音(PやD)、流音(L)などは、高音域へ広がるエネルギーを持つ。全体に言葉がはっきりとして、声のエネルギーを感じさ

せる。

(4) わらべうたの旋律型と半音の処理について

「どんどんばしわたれ」(S幼稚園楽譜:図2-1)と「なべなべそこぬけ」(A保育園・C保育園楽譜:図2-2,3)は隣り合わせの3音旋律で、小泉文夫の音階理論では、エンゲ・メロディー型3音旋律であり半音の進行はない。この旋律型は終止音が真中の音になる。

「ずいずいずっころばし」(B保育園楽譜:図2-4)は本来、出だしから15拍(ずいずいずっころばし〜とっぴんしゃん)までは都節ペンタコルド型の旋律であるが、子ども達は最初の9拍目(ちゃつぽに)から都節ではなく、律音階で歌っている。また、35拍目から49拍(おっとさんがよんでも〜いきっこなしよ)も都節でなく、出だしの音がその前の音に引きずられ、1音高く始まっていることもあり、エンゲ・メロディー型3音旋律になっている。「ちゃつぽに」「とっぴんしゃん」「いきっこなしよ」などの半音的進行を歌うことは幼児にとっては難しいようである。50拍から最後は隣り合わせの2音旋律(エンゲ・メロディー型2音旋律)であり、終止音は上の音となっている。

2) 日本語のリズムやアクセントとの関係

(1) 日本語のリズムとの関係

坂野は日本語の拍節構造の基本を八音としている。音が二つで律拍、律拍が二つで半句、半句が二つで句となり、八音の単位(句)がくり返されることによって定型的なリズムが生まれるとしている。小泉文夫はわらべうたの基本リズムを二拍子として、拍が二つずつで前小節と後小節となり、前小節と後小節で前動機、後半の前小節と後小節で後動機となり、4小節8拍でフレーズ(句)を作るとして⁴⁾いる。さらにフレーズとフレーズの関係について、第一句(第1フレーズ)は「うたいだし」、第二句は問、第三句は答え、第四句、第五句も問と答えになるとしている。「わらべうた」の場合は必ずしも1音

1拍でなく、1拍に2音あるいは4音が入る場合もあるが、2音・2拍が基本となっている。

坂野や小泉の日本語の基本リズム論から、子ども達が歌ったわらべうたを分析する。

① 「どんどんばしわたれ」(楽譜:図2-1)

2拍子で1拍に2音が基本構造であるが、出だしの「どんどん」のように1拍に4音が入ると、「どん」のくり返しがリズムカルで勢いを感じさせ効果的である。また、「わたれ」の「れ」は他の拍が2音であるのに、1音であり、区切りや強く呼びかける効果を持つ。

第1フレーズの最初の半句「どんどんばしわたれ」(または前動機)は歌い出し、次の半句「さあ わたれ」は最初の半句を受けて強調している。第2フレーズの最初の半句「こんこがでるぞ」は問いかけであり、次の半句「さあわたれ」は答えとなる。

② 「なべなべそこぬけ」(楽譜:図2-2,3)

2拍子であり、最初の半句「なべなべ」は1音1拍で少しゆったりしており、「なべ」をくり返すことにより、遊びへの準備ができる。次の半句「そこぬけ」は1拍1音と1拍2音の組み合わせがリズムカルに感じられる。第2句「そこがぬけたら かえりましよ」の最初は1拍1音であるが、次から1拍2音になり、動きを感じさせる。

第1フレーズ「なべなべそこぬけ」は歌い出し。第2フレーズの最初の半句「そこがぬけたら」は問いで、次の半句「かえりましよ」は答えである。

③ 「ずいずいずっころばし」(楽譜:図2-4)

2拍子である。1拍2音が主であるが、2音のリズムに長短がある。また、ちゃ、とっ、ぴん、しゃん、しよ、くっ、ちゅ、おっ、さん、など日本語の音としては2音や3音になるものを1音として扱っていることにより、リズムカルな効果を持つ。2音2拍

(4拍)の半句が基本となってフレーズ(句)をつくっているが、第2フレーズ(第2句)の途中の(とっぴん しゃんぬけ)や、第4フレーズ(第4句)から第5フレーズ(第5句)に入るところ(いき いっこなし よーいどの)などは言葉の切れ目に休符が入らず、息つぎを速くしなければならない。これにより、テンポの良さを感じさせる効果を持つ。また、「どんどこしょ」や「ちゅう ちゅう ちゅう」などの部分でも拍の動きが変化している。

句と句の関係であるが、言葉の意味が通じないなぞなぞのような歌詞であるので、問いと答えのような対応でなく、違う種類の対応があるように思われる。たとえば、第1フレーズ(第1句)から第4フレーズ(第4句)までは、言葉の面白さがそれぞれの句にある。第1フレーズ(第1句)の「ずいずいずっころばし」の「ずい」や「ずっころ」、第2フレーズ(第2句)の「とっぴんしゃん」、「どんどこしょ」、第3フレーズ(第3句)の「ちゅうちゅうちゅう」などである。また、第4フレーズ(第4句)「おっとさんがよんでも、おっかさんがよんでもいきいっこなしよ」と第5フレーズ(第5句)「いどのまわりでおちゃわんかいたのだあれ」には、呼びかけと謎解きのようなある種の対応が感じられる。

(2) 日本語のアクセントとメロディーの関係

日本語のアクセントは高低アクセントである。方言によっては高低が変化することはあるが、基本は高低である。しかし、ニュアンスとして状況に応じた多少の変化はある。この日本語のアクセントと、わらべうたの旋律の関係について分析する。

ここでは共通語のアクセントとして検討するが、NHK日本語発音アクセント辞典⁵⁾によると、高低アクセントはいくつかの型に分類される。

「名詞+が」の形でのアクセントの型

- ① 平板式 平板型 1拍語が低で始まり 次に高
- ② 起伏式
 - ②-1 尾高型 2拍語が低で始まり、次に高、最後の「が」が低
 - ②-2 中高型 3拍語が低で始まり、次に高、最後2語が低
 - ②-3 中高型 4拍語が低で始まり、次に高、最後3語が低
 - ②-4 中高型 5拍語が低で始まり、次に高、最後4語が低

③ 頭高型 1拍語が高で始まり 次に低

以上は名詞だけではなく、形容詞や動詞にもあてはまる。わらべうたの言葉の高低アクセントとメロディーの関係を次に検討する。

① 「どんどんばしわたれ」(楽譜：図2-1)

先に述べたように隣合わせの3音旋律であり、一番高い音は最初の半句の最後「わたれ」と第2フレーズ(句)「こんこがでるぞ」の2ヶ所だけである。また、尾高型の「どんどん」、平板型の「わたれ」、頭高型の「こんこ」、「でるぞ」など、1拍目と2拍目のアクセントが変わる言葉は、2音続きで高低をつけるようになっている。このようなアクセントの単純化により、1拍に1歩足を踏み鳴らして遊ぶ動きを助けている。その上で「わたれ」の「れ」や「でるぞ」の「ぞ」を高く歌い、強調している。

② 「なべなべそこぬけ」(楽譜：図2-2,3)

この歌も隣合わせの3音旋律であり、一番高い音は「ぬけたら」だけである。平板型の「そこぬけ」や「そこが」のアクセントを単純化して同音にしている。また、「ぬけたら」は尾高型であるが、1拍2音を同じ高さにして、さらに「たら」を高くして強調している。最後の「かえりましょ」は尾高型であるが、全体を同音に単純化し、さらに「ま」を下げて、歌の最後を強調している。このような1拍ごとに単純化された旋律は腕をふる動きを助け、歌の最後の強調は最後に背中合

わせになるタイミングを合わせる効果を持つ。

③ 「ずいずいずっころばし」 (楽譜：図2-4)

第1フレーズ(句)と第2フレーズ(句)の「とっぴんしゃん」までは都節ペンタコルド型であるが、子ども達は半音を全音にして歌っていた。第1フレーズは3音、第2フレーズ前半は5音の構成である。第1フレーズは3音であるが、アクセントを単純化するだけでなく、旋律的な動きもある。「ずいずい」や「ごまみそ」の順次進行の音などである。第2フレーズ前半は5音であり、言葉のアクセントが拡大され、より旋律的な動きになっている。「ちゃつぽに」「おわれて」「とっぴんしゃん」などである。第2フレーズ後半は3音であり、「どんどこしょ」は言葉のアクセントがより旋律的な動きになっている。第4フレーズは隣り合わせの3音旋律であり、1拍2音でアクセントを単純化しているが、最後の「いきっこ」は多少旋律的な動きを感じる部分である。第5フレーズは2音旋律で、アクセントは1拍2音で単純化されている。最後の「だあれ」で「あ」で下がり、「れ」で上がって、歌の終わりを強調している。

3) 旋律構造

① 「どんどんばしわたれ」 (楽譜：図2-1)

「どんどんばしわたれ さあわたれ」と「こんこがでるぞ さあわたれ」は同じ旋律のくり返しである。「わたれ」が音の高さは少し変わっているが、似た旋律線を描いて3回くり返され、遊びの進展を盛り上げている。

② 「なべなべそこぬけ」 (楽譜：図2-2,3)

出だしの「なべ」が2回くり返されることによって、遊びに入りやすくなっている。「そこぬけ」と「そこがぬけたら」は同じ旋律で始まるが、「ぬけたら」で音が高くなり、最後の「かえりましょ」につなげている。

③ 「ずいずいずっころばし」 (楽譜：図2-4)

出だしの「ずいずい」と「ごまみそずい」は同じ旋律である。「ずい」「ずっころ」「ちゅう」などの音のくり返しがリズムカルである。「とっぴんしゃん」「どんどこしょ」などの言葉もくり返しではないが、リズムカルである。「おっとさんがよんでも」と「おっかさんがよんでも」は同じ旋律のくり返しであるとともに、対比のある言葉のくり返しとなっている。「いどのまわりで」と「おちゃわんかいたの」も似ている旋律のくり返しとなっている。

以上の通り、言葉と旋律が同じもののくり返し、語感が似た言葉のくり返し、対比のある言葉のくり返し、違う言葉で同じ旋律のくり返しなどが効果的に使われている。

4) 拍子

拍子は3曲とも記譜上は4分の2拍子であるが、これは西洋的な2拍子ではない。西洋音楽の4分の2拍子は「強弱」、4分の4拍子は「強弱中弱」、また、舞曲の流れを持つ楽曲はその舞曲の拍節感がある。しかし、日本の「わらべうた」にはそのような拍節感はない。言葉のリズムやアクセント、遊びの所作からの拍節感であり、強弱でなく、すべての拍が同じ強さである1拍子的な拍節感を持っている。

S幼稚園の振幅分析図(図1-1)を見ると、全般的には拍の頭が強いが、特に強いのは最初の半句の終わりの「わたれ」、最初の句(フレーズ)の終わりの「わたれ」、第2句の「こんこ」である。「わたれ」は西洋的な2拍子とすれば弱拍にあたる部分であるが、強く呼びかけており、最初の「わたれ」は高低アクセントも高く、実際の音高も一番高くなっている。A保育園とC保育園の「なべなべそこぬけ」(図1-2,3)の振幅分析図を見ると、拍の頭が強く歌われる。また、句(フレーズ)の出だしで手を振るので、反動をつ

けるように句の出だしは強く歌われる傾向がある。

IV 考察

以上より、「わらべうた」は日本語のリズムやアクセント、日本音楽の基層にある旋律型などと深く関係していると言える。担任アンケートにも日本語の面白さを子ども達が感じているとの指摘があった。しかし、日本語のリズムやアクセントにただ忠実に従っているのではない。基本的なリズムやアクセントから少しずれたところに面白さがある。そのおもしろさが、子ども達の歌声を生き生きさせ、子ども達の心を遊びに引き入れる。「わらべうた」の言葉には意味不明なものも多いが、子ども達はそのようなものにもなんらかのイメージを持って楽しんでいる。

また、くり返しが効果的に使われている。フレーズが問と答えのようにくり返されたり、言葉の対比があったり、言葉が違ってても旋律がくり返されることもある。少しずつ形を変えてくり返す中でイメージが広がり、そのイメージの広がりが遊びの進展と結びついている。担任アンケートにも指摘があるが、わらべうたは自然にくり返しが楽しめるので、幼児の心に添うものである。

わらべうたは集団で楽しめるものである。単純ではあるがルールがあり、ルールと歌と遊びの所作が結びついている。このことで、子ども達は集団になっても安心して遊ぶことができる。担任アンケートでも、わらべうたの持つゲーム性や集団で楽しめることを評価している。

わらべうたは2音や3音、4音でできているものが多い。もし、歌が上手くない子どもがいたり、出だしの音が揃わなくても、また、途中から音がずれても、音が少ないためそれほど違和感がなく歌うことができる。音のずれだけに注意が行くのではなく、言葉、

歌、体の動きが一体となって、他の子ども達と楽しく遊ぶ体験が他者とのコミュニケーションの基本をつくる。

わらべうたは4分の2拍子が基本であるが、西洋的な拍節感でなく、1拍子的な拍節感を持つ。また、句（フレーズ）の終わりや、特徴のある言葉の最後を強く歌うことも多い。このことは日本語の高低アクセントやリズム、また、遊び方と関係している。日本語の持つ特徴を思い切り歌い出すことは、子ども達の言葉をはっきりさせ、声に高音域のエネルギーを持たせ、子ども達が元気いっばいに楽しむことのできる要因となっている。

わらべうたには動きの要素も取り入れられている。「どんどんばしわたれ」では円になって歩く。「なべなべそこぬけ」では2人で手を取って振り、最後は逆向きになるなど、体の柔軟性や他者の動きに合わせるタイミングのつかみ方が必要である。楽しみながら自然に様々な動きを身につけてゆくことができる。

今回の結果は4園の調査であるので、今後はさらにデータの蓄積が必要であると考ええる。また、担任アンケートにあるように、わらべうたの効果については、保育者に認められているが、中にはわらべうたになじみがないとの意見もあった。わらべうたは、担任アンケートの9にあるように担任自身も子どもの時に楽しんだものであるが、その教育的効果について、体系的に学んでいないことがその背景にあるのではないだろうか。

日本の幼児教育・保育の中でどのようにわらべうたを生かし、子ども達の健やかな成長を支えるものとするのかについて、さらに検討が必要であると考ええる。

注・引用文献

- 1) R・シュタイナー. 西川隆範訳. 音楽の本質と人間の音体験. 47-49. 東京:イザラ書房; 1993.
- 2) 小泉文夫. 日本伝統音楽の研究 I. 127-134. 東京:音楽之友社;1969.
- 3) 坂野信彦. 七五調の謎をとく-日本語リズム原論. 52-53. 東京:大修館書店;1996.
- 4) 小泉文夫. 日本の音Ⅲ-日本音楽の基礎理論. 335-339. 東京:平凡社;1994.
- 5) NHK放送文化研究所(編). NHK新版日本語発音アクセント辞典. 付録資料集・解説175. 東京:NHK放送出版協会;2012.

文献一覧

- 小泉文夫. 日本伝統音楽の研究 I. 東京:音楽之友社;1969.
- 小泉文夫. 日本の音Ⅲ日本音楽の基礎理論. 東京:平凡社;1994.
- 藤田美美子. 日本の子どもたちの音楽性とその育ちに関する民族誌学的研究. 国立音楽大学大学院年報. 1998;10:43-72.